

モニタージュ理論の実践的検証

大阪芸術大学短期大学部 メディア・芸術学科 教授 三原光尋

映画演出技法に於いて、映像創成期にモニタージュ技法、所謂カット割りが生み出された事により、物語を伝える情報量は大きな進化を遂げました。今ある世界中の映画産業は、このモニタージュ技法を元に成り立っているとと言っても過言ではないでしょう。それまでは、物語を記録するに留まっていた完成作品。例えば日本では、歌舞伎などの演目を全体像として撮影しては、それを興行で見せていました。今にして思えば味気のない映像ですが、当時はそれでも映し出される映像世界に多くの人達が魅了され、鑑賞に押し寄せたものです。それが、モニタージュ技法が導入されるとその物語世界は、一変!一つのシークエンスからカットを割られることにより、展開する物語に強弱やテンポが生まれ、今で言うところの“没入感”が増したのです。ここからがエンターティメントとしての映画産業の始まりではないでしょうか?

今回の研究課題は、このモニタージュ理論を取り上げ、そのモニタージュが物語を語るのに、如何に必要不可欠かを、実践として物語を撮影し、検証してみようと試みました。

具体的な内容は、作品としてのテーマ性を持ちながら幾つかの短編映画脚本を作成し、それを元に、①モニタージュ（カット割り有り）を行い完成させた映画と、②ノンモニタージュ（カット割り無しのワンカット）での二本の別映画を作り、それを連続して鑑賞しては、物語の意味合いや、受け手の感じ方、作品に込めた想いを伝えるのにはどのような相違が応じるかに、取り組んでみました。

五月、まずは脚本制作に取り掛かり、映像学科卒業生の脚本家渡嘉敷海音君に参加を促し、今回の意図を説明しては、幾つかの短編映画のアイデアを貰い、私はロケ地候補としての諏訪湖周りにロケハンに出かけました。今回、私の居住区の東京では、ロケ地の許可申請や、映り込んだりする人達の肖像権、ウイルス対策、インバウンドの混雑、等の対処すべき問題点の多さを避けては、研究に集中できる環境を探り、景観も良く、上記諸事情からの呪縛からも逃れられる諏訪湖周りを撮影地にと考えました。幸い古民家カフェなども撮影に使用させて頂けることとなり、屋外や室内、あらゆる場所での撮影を計画しました。

八月、撮影は映像学科卒業生の水本洋平氏にお願いし、彼からの提案で、モニタージュの意味合いの検証で色彩が入ると、映像の情報量が多くなり研究目的がぼやけるのではと、白黒作品で仕上げる提案がなされ、承諾しました。

俳優の太田美恵さん&清水伸氏と、私含めて四名でロケに出向きました。脚本は、男と女の出口の見えない二人の道行の短編十数本を書き上げ、撮影場所も、湖畔沿い、走る車中、コンビニ駐車場、ホテル一室、夜の川面、深い山中、一望できるテラス、雨の田畑、民家カフェ、古びたバス停、等々…。諏訪湖周辺を一杯に活用し、カメラに収めました。

勿論、撮影はその研究としての①モニタージュ（カ

ット割り有り）&②ノンモニタージュ（カット割り無し）の二本を並行して執り行いました。猛暑の炎天下が厳しかったのですが、大きなトラブルもなく、順調に撮影を終えては、編集へと。

水本氏曰く「カメラはiPhone13miniを使用しました。カメラアプリもBlackmagic Cam。今回のテーマの“カットを割る”という行為は、人物を様々なサイズで撮影するということでもあります。本来の映画用カメラなら、レンズをワイドから、標準・望遠レンズへと交換しクローズアップなどを撮影していきます。しかしiPhoneに搭載のレンズは、ワイドレンズとスーパーワイドレンズのみ。ワイド系だけでは、必要なカットが撮れない可能性もあり、考えた末、ヨリのカットは、致し方なく画面をピンチしてセンサーを拡大し、映像の画素そのものを拡大した状態で撮影しました」と。

九月、これも映像学科卒業生の編集マン浅田菜祐花さんをお願いし、作業に入ってもらいました。渡嘉敷君や水本氏にも引き続きアドバイスを貰い、十二月中頃に、研究作品の完成に至りました。

で、大切なのは、ここからです。十二月下旬から、この十数本の異なる2パターンの短編映画を外部の幾人かに鑑賞して貰い、その反応を聞き取りディスカッションを始めました。

まずは映像学科卒業生の面々に集まってもらい、大型モニターにて鑑賞。その後の座談会の意見を取り纏めますと、

「ワンカットの物語はリアル感はずが、物語が物足りなく感じる」「カット割りによる強弱がつくことにより、登場人物に感情が移る。ワンカットは、凝視することにより、こちらが作品の意味を見つける楽しさがある」「ワンカットは、押しつけがましくなく、スクリーンで観たら、断然こちらが良い」「カット割りは、ともすれば意味を持たせ過ぎて、考える余白がない」「ワンカット撮影は、楽をして撮影しているような感じが…」「俳優の気持ちによるアップがあると、安心する」色々な面白い意見が飛び出して、充実した鑑賞後の時間となりました。

総括として、今回の研究は、改めてモニタージュ理論の意味合いを痛感するに至り、この研究経験は、これからの私の創作を、より創造性を高める知識の財産となり得ました。時代に合った適切な演出技法の見極めが必要不可欠とも再認識しました。

それは学院での今後の映像授業に於いて、学生諸君らに、作品創作の一環で示せる実践的な良い教材となり得て、大いに活用させて頂きたいと思えます。

当研究に、ご支援頂き有り難うございました。